

プラトンの方法：『テアイテトス』一四三D～一五 一Eの語るもの

水崎, 博明
第一薬科大学：講師

<https://doi.org/10.15017/27509>

出版情報：哲学論文集. 11, pp.19-38, 1975-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：



プラトンの方法

——『テアイテトス』一四三D—一五一Eの語るもの——

水 崎 博 明

—

プラトンの方法

周知の如くプラトンの対話篇は、その研究家たちによって、それぞれの内容に鑑みたそれぞれの副題が古来より与えられてきており、我々の対話篇の場合、それは「知識について」というふうに与えられる習わしになっている。そういうわけで、我々はこれを読む以前にも、それが何を論じたものかということであれば、その答を予め簡単に知ることが出来ることになっている。そうして、実際これを読んでみた場合にもまた、我々は、その内容の理解の深淺といった問いはさておいてもかくも知識について議論しているのだというその点についてだけを問うのであれば、古人の理解に対して恐らく賛意を表することが出来るだろうと思われる。そこで今、我々がすでに読者であるとしてみよう。上の事情からして、我々はこの対話篇が知識について議論しているのだと知っていると言われてよいことにもなろう。しかしながら、その議論の方法についてはどうであろうか。我々には何がたしかに知られており、我々は何をたしかなこととして語りうるであろうか。——知識について議論するためには、何はともあれ、まずは知識にまさしくつくのでなければならぬ。してみれば「知識とは何か」と先ず問わ

ねばならぬ。そして、然り、プラトンは劇としての設定をとのえるや否や、たしかに先ず以ってそう問うことにより對話を編み始めている。何故なら、テアイテトスとその仲間とを傍らに招きよせたソクラテスは、人の言う自分とテアイテトスとの心身のもちまえの酷似というのをよいことにして、早速にも自らこう問いかけているのだから、

……いや、しかし、とは言うものの他の点なら、先ずはそれらをめぐっては程よき有様というところだが、しかし何かほんの僅かばかりのことでは行く悩んでおって、それを君やこの人たちのところでいっしょになつて見てみなくてはならぬところだ、と（一四五A）。

そして、その僅かばかりのこととは何であるかと言えば、

……その、それなんだよ、君、ぼくの行き悩んでおつてこのぼくの所だけでは十分につかむことが出来ないでいるのは。曰く、知識とはそもそも何であるのか（一四五E—一四六A）。

と、こう明らかにしていく。——我々は、何かそうしたことを知っているようである。

しかしながら、人は反問するかも知れぬ。知識についての議論は「知識とは何か」と先ず問うことによつてこそなされるのだというようなことは、余りにも自明なことであるし、そうした指摘は全くトリヴィアルではないか。プラトンの方法というものを探るところの、我々の他ならぬ方法として、そうした確認がいったいどんな意味をもつと言うのか、と。筆者はこう答えようと思う——あらゆる人にあらゆる人の、それなりの方法があるのではないか。あるいは、方法とは、あらゆる人にそれなりに彼のものとなりゆくべきものではないか。もしそうだとすれば、筆者の方法とは、まさしくその自明な地点へまでもかくも引き返すそうした方法なのだ、と。ただし筆者は今、何かしら胸騒ぎがするのである——「知識とは何か」と問うことは「何が知識か」と問うこととは決して同一ではないのではないか。——とは何か」の問いという定義を求めるかたちのものとして、人々がこれこそソクラテス・プラトンの独特の方法だと思ひなして額縁の中へ入れてしまつたつものの、プラトンのある思索の軌跡は、あにはからんや、我々の手をすりぬけてしまつていてのではないか。プラトン

の「知識とは何か」という問いの出し方は、むしろ我々をそのように呆然自失させてしまうほどに巧みでもあり、また自然の極みともいうべきものではなかったか、と。こう筆者が言い立てる理由を、今いくらかなりともこの章の範囲において明らかにしておこう――

たとえば我々の田中美知太郎『テアイテトス』註解を見るとしよう。我々はそこに、『テアイテトス』の主題は何であるか、そしてその主題はどのようにして対話するものの間に自らの位置を定めてゆくのか、それはどういうものとなったか、という経緯をめぐり、ひとつのすぐれた註解を与えられているのであるが、それは、およそ次のような骨子のものだと言ってよいだろう――⁽³⁾

- (1) 知識を求めるということ、そしてその晩に人は智という魂について称讃さるべきアレテーを獲得するのだということ、こうした点をめぐった強い人間的関心が、対話篇の生き生きとした雰囲気を作ってゆくこと。
- (2) ただしかかる智の問題は、知識と智との関係如何という問いを軸にした時、「対話篇の一部分と交差して別の奥行を示す背景的存在となって」いくこと。
- (3) それは、『テアイテトス』は人の智というものを直接的に問うものではなく、「それだけでひとつひとつ離してとりあつかえるような」中立物としての知識をこそ問題とするからであること。
- (4) そしてそのような問いが主題となる時、それが「(人は) 何を知るか」「(人のその知は) 何の知識か」というかたちの問いとして押え直されるなら、『テアイテトス』の主題は、智という問題を背景にすれば「知識とは何か」ということでもあろうが、しかし端的には、それよりはむしろ「何が知識か」というかたちのものとして理解されねばならぬこと。
- (5) ただしこれら二つの問いは「主語と述語とが互いに交換されうる極限的な場合」にのみ同一だとみなされうるものであり、二つの問いの間には「種々重要な差異」があるのだ。しかし対話篇では、この二つの問いの結びつき如何については、かなりゆるく考えられているということ。

さて、こうした註解を余儀ならしめた対話の意味するところを明らかにしてゆくことは、実にむづかしいことではないかと、筆者には今思われる。というのは、上の註解に従えば『テアイテトス』の主題をきめてゆくものは、何か立体的な構造とでも呼ぶべきであるようなそうしたものであって、しかもそれ故に、すでに内的で必然的なある秩序を示しているのではないかと思われるからである。それは他ならぬ「知識とは何か」「何が知識か」というこの問いをめぐる秩序であると思われる。何故なら註解は、一方「知識とは何か」の問いの側には「人とその智」ということへの奥行を考え、他方「何が知識か」の側には「知るもの」「知られるもの」というある断面を考えているのであるから、我々は、これら奥行と切断面とをもった全体をまさしく全体として見る時には、最早動かすことのできぬある秩序の下に見ているはずだからである。すなわち、註解が当然のことながら振幅を示している如く、智と知識とは、その同一性に注目すれば、あることの学び↓学びによる知識↓知識することによる智といった、ひとつの「奥行き」あるいは「尋めゆき」^{タクトロギヤ}としてかかる人のより智なるありかたへの「なりゆき」を語ることになるのであるが（——我々はこのことを我々の意味で *ταυτολογία*〈同一物語り〉と名づけよう）⁴、しかし差異性に注目すれば、知識はそれとして何を知ってゆくのかという「何を」の場面が展開してくるのだと言ってよいだろう（我々はこれを我々の意味で *ετερολογία*〈差異物語り〉と名づけよう）。註解は、この *ετερολογία* の場面こそ『テアイテトス』の主題ではないかと正面的には一応考えて、そこからまた「何が知識か」と問う問いこそ主題だとしたのだが、しかし見られる如く *ταυτολογία* への考慮も決しておろそかにされているわけではない。ただやはりその考慮が *implicit* なままで、我々と同様「知識とは何か」「何が知識か」の問いは決して同一ではなく「種々重要な差異」があるのだとはしているものの、「主語と述語とが互いに交換可能な極限的な場合」というような、それ自身 *implicit* の極限的なのか *explicit* の極限的なか最早区別することができぬ程の大問題への示唆で、筆が止まっているだけのことだと言えるだろう。⁽⁴⁾ とは言え我々が今この点だけをとりあげて直接云々するのは実につまらぬこととなろうし、否、大切なのは、註解が我々に教えている上の如き振幅ということであり、そしてこの振幅こそ『テアイテトス』そのものが示しているのだということを理解することだ

と、筆者には思われる。それというのは、註解も示唆していると思われるように、我々は「知識とは何か」の問いを決して「何が知識か」の問いへと還元したり解消したりすることはできぬ。だがしかし、にも拘らず「知識とは何か」の問いは「何が知識であればそれは……」というかたちで「何が知識か」という問いを問わねばならぬということである。すなわち我々はある迂路を経ることが不可避であると思われるのだ。

この事情を『テアイテトス』に即して明らかにすることは、むしろやさしい。先ず、これは誰しもたやすく気づくであろうことだが、主題たるべき「何が知識か」ということの検討は、その問いに対する解答そのものを論駁することにはそれほどの思考を注いではおらず、むしろそれはあつけないほどのものである、という事情がある。思考の努力の大部分は、解答が提出されて論駁されてしまうまでのその間のことへと注がれているのである。しかしながらこのことは、筆者の理解では、「何が知識か」の問いはその解答そのものを得るために提出されているのではなくて、そのように問うことによってこそ明らかにされてくるであろう知識論的意味の⁽⁵⁾検討の方こそが本筋であるということ、少くとも示唆していると思われるのである。もしそうだとすれば、「何が知識か」の問いの核心にはすでにして「知識とは何か」の問いが秘かに(implicitに)埋め込まれているのだと、こう理解せねばならぬのではなからうかと思うのである。然り、それ故にこそ、かの方法的自省も一度は explicit に言明されることにもなってくるのではないか。つまりこうである——一九六D～一九七Aにおける「何か恥すべきことを敢えて行って、知っているとはどういうことなのかを描いてみよう。何故なら知識を未だ何であるか知らぬのに、⁶知っている」とか「知識」とか「了解」とかいったことばを用いて来たのは恥すべきことであろうけれど、しかしそうした言葉にふれずにはすまぬようだから」といった率直な白状と方法への新たな覚悟、及びそうして描かれる鳩舎の比喩とは、しかしながらその挙句にはふたたび「『知識とは何か』の問いよりも先には『真なるドクサが知識であろうよ』といった問いは取扱うこと能わず」とする反省(二〇〇C D)へと立戻らざるを得なかった。さすれば「恥すべきことを敢えてやってみる」というパラドックスとは、「何が知識か」の問いと「知識とは何か」の問い

の間の間隙を「知識とはどのようなものであるか」と比喩することによって埋めて結びつけ、二つの問いをその仕方において等価だとみなすことに他ならぬと思われる。⁽⁶⁾そして、加うるにまたそのことは、しかし「何が知識か」の問いの「知識とは何か」の問いに対する劣位にも拘らずということであつたのだから、その示すことは、まさしく上に見た implicit な方法を意識的に explicit にしていることではないか——と、こういうわけである。

さて、以上もしも眞実は筆者の理解のとおりであるならば、また筆者は、優位にある問いの劣位にある問いへの迂回の必然を自覚していたものがプラトンの方法であつたであろうことを、証明しえたであらうと思う。

そして他方、こうした確認の上に立つて諸々の『テアイテトス』研究の動静を概観すれば、強いて皮相な対照をつけるだけのことに評されるかも知れないが、しかしそれらは、我々が我々の眼前に見出だしている上の如きアポリアに対して殆ど無邪気だと言ふべきものであつて、「何が知識であるか」の問いの解答へと過度に意識を局限してしまつてはいはせぬかと筆者は危ぶむのである。まさしくあの過猶不及と評される過度において。すなわちプラトン自身の意識的方法と正確に対比するならば、むしろそうした意識の局限というそのことによって、すでに意識の名に偽いせぬものとなりはてしているとさえ思われるのだ。かのF・M・コーンフォード以来の『テアイテトス』の第一部第二部第三部といった構造把握は、最近のM・J・マクドウェル⁽⁷⁾の訳註の仕事に至るまで温存されてもいるのだが、それは成程尤もだと受け入れてよいものでもあらう。しかしながら、今、理由をあげぬまま強いて批判的に語ってしまうなら、いずれも高を括つた尤もらしさに過ぎぬと言つてよいと思う。「第一部第二部第三部」と彼らが安逸の中で呼ぶものの前に書き残されているプラトンの筆力の痕跡を、これまた安逸の中で Introductory Dialogue などと彼らが呼ぶ時、智慧との心染みとしてのプラトンの問答法は、すでにその巨大な第一歩をあらゆる人間の苦悩の意識の中で踏み出しているのだということに、何のセンスをも持ち合わせていないのではないかと恐れられるのである。

さて、眞実は以上のとおりであるならば、筆者は、『テアイテトス』を読む人々研究する人々が一方で殆ど自明だとしてい

ることは、しかし他方ではまさしく若きテアイテトスがソクラテスの問いに直面して覚えたような深刻なアポリアに隣合っているのだということ、従ってそうした自明性もアポリアを発見せぬようなそれであろうものなら、それこそがその途端に単なるトリヴィアルへと転落し、かつ何かより大きな見方からすれば、単なるテュケー（運）やカオス（混沌）に過ぎぬものとなってしまふこと、それ故、逆にもしもアポリアの発見の意志ある場合には「知識につくべし、されば先ず知識とは何かと問うべし」とした文字通りトリヴィアルな（ありふれた三叉路の）考えも、すでに半歩は愛智の王道へと踏み入っているはずだということ、こうしたことを語りえただろうと思う。そこで筆者は、筆者のいう胸騒ぎもプラトンの方法をより一層明らかなものとするために必要な何らかの力を秘めているのだと楽観して、ダイモーンの合図を期待しながら、次にあらためてプラトンの問いの出し方のみを熟視してみようと思う。

二

知識とは何か、と問う。しかし決して「何々の」知識、「何々何々の」知識とかいった風には答えられてはならないのだ、とこうソクラテスは注意する。そのわけは、知識は例示も枚挙もされ得ぬからだという。それはこういうことだと言う——例示ということそれ自身には、決して知識とは何かと問うている問い手の了解（*ouketers*）を成立たせてくれるものはない。何故なら、それこそ例えようもなく知らぬのだから。しかしまた何かあるものの例を示す例示の力不足を、例の倍加と枚挙ということとで補おうとしても、いったいいつこれでよしという限り（*telos*）がつけられるというのか、何やらまわりにまわる途方もない作業が続くだけではないかという疑いを、その営み自身で解決する力はない。従ってむしろ我々の問答は、たとえば「粘土とは何か」という問いであれば「陶工の」粘土とか「竈師の」粘土とかいったような「誰々の」粘土⁽⁹⁾という仕方ではなく、「土と水とが混ったもの」だというふうに端的に答えるようなそういうものでなくてはいけない。何故なら、

問いへの解答の中には、それを知らぬからこそ問い手が問うている当の言葉が用いられてはいけなからだ——と。たしかにそうではないか。知っていることも知らぬことも、これをおよそひとつの透徹として見れば、比喩でもって語るなら、それらはさながら水晶と水晶とがそれぞれ自らであればお互いを徹底的に排除し、ぶつかればキシキシと鳴るといったような、そうした硬質のものだと語られはしないか。このことをめぐり多くを語る力は、今筆者にはない。しかしながら我我としては、未知であることのソクラテスによるこのあるひとつの純化には、むしろただ率直に同意すべきではないか。

しかしながら、また、この未知であることの純化ということについてあらためて思索の糸をたぐることになれば、そこにはひとつの困難がすでに生じてくるのもたしかだ。というのは、問いも問い、他ならぬ「知識とは何か」という問いを問うのは、知識を何であると知らぬから問うのであろうが、にも拘らずその問いへの解答の中には「すでに知れる」言葉しかあってはならぬ、というわけだからだ。人は推察するであらう、こうした困難こそがかの『メノン』における探究のアポリアへと展開したのであり、そうしてそれはその時、文字通り sophisticate されざるを得なかったはずだ、と。そして、たしかにまたこれこそが、先に見た鳩舎の比喩を前後しこれに絡んだ方法論的自省を、強いるものであったのだ、と。

さてしかしこのアポリアは何とか打開されねばならぬわけだが、そこをプラトンは、ソクラテスとテアイテトスとに実に当意即妙なやりとりを語らせながら切り拓いていくようである。というのは、未知のものは既知のものによって答えられねばならぬとした先の望ましき問答の要求が、テアイテトスによってもまた、それは平方根 (*dōvavus*) の幾何学的な取扱の場合にも応用されるであらうという風に、間髪を入れぬ呼応によって応じられているということである。

そこで、我々はその呼応の様を見よう。

先ず大筋が——数の上では無限な平方根をば「一」へと統べて (*ovλaβev eis én*)、それによってすべてそれら平方根を呼んでゆこう——とした試みであることが予め示されるが、その試みのひとつひとつは順を追って次のように語られる。

テアイテトス「数を全体として私たちは二つに分割(διερίξαμεν)しました。つまり、一方は、等しき数が等しき数で倍するというかたちで自らとなるということの可能なもので、そうしたかたちに関しこれを正方形になぞらえて(ἀμειψόμενοι)、正方形数とか等辺数と呼んだ(ῥηομένους)わけです」

ソクラテス「うん、それはいいね」

テアイテトス「そこで、その間にある方ですが、それらには3も5も、またすべて等しき数が等しき数で倍するというかたちでは自らとはなりえずに、あるいはより大きい数がより小さい数で、あるいはより小さい数がより大きい数で倍するという形になっていて、他方いつも、より大なるものとより小なるもの、というかたちで辺はその数を取囲むことになるものがあるのですが、この方は長方形なる形に今度はなぞらえて、長方形数と呼んだわけです」

ソクラテス「実に美事だ。しかしそのあとはどうなんだ」

テアイテトス「等辺かつ平面なる数をば正方形で囲むことになっているかぎりのものは、一方、これを「長さ」だと私たちは定め、他方、不等辺なる数をば囲んでいるものは、これを「可能なもの」としました。それは、一方「長さ」によるならば前者と尺度を同じにしえないが、しかし他方、可能な形に自らをなしている平面によるならば尺度を同じくしている、とこう考えてのことですが、云々」(二四七D—一四八B)

と、いうふうに言われる。そして、このように呼応されたテアイテトスの場合は、さらに他ならぬ知識の場合にも生かさるべき方法なのだと、次のようにも言われることになる。すなわち——他のいろいろのことがらについてもだが、なかんづく知識について、それはそもそも何であるかロゴスを把握するように、云々——とか——平方根についての解答を真似ながら、ちょうどそれらがいろいろと沢山あるのでそれらをひとつの形によって取囲んで把握していたように、そのようにまた、いろいろと多くある知識をひとつのロゴスによって呼ぶように努めてくれ給え——というふう(一四八CD)すなわちこれらによって、先に見た「一へと統べる」ということに要求される内実がより明らかにされていくのだと

いえるだろう。

そこで今、こうした呼応によって、アポリアはいかなる点が切り拓かれてゆくのかを見てみよう。

先ずひとつたしかめられることがある。それは、——知識の例示と枚挙との拒否ということは、我々相互の了解と知らるべきものの限定⁽¹²⁾ということを要求する故のそれであつたのだが、しかしその「解と限定」ということは、実は決して孤々独立した二つの要求ではなかつたのだ。否、この *oûveais- $\pi\acute{\epsilon}\rho\alpha\varsigma$* (相互了解—限定) の問題とは、思うに前者は単数に後者は複数にかかわるのでもあらうが、しかしいづれにしてもそれは、「何々の」「知識」「何々何々の」「知識」ということを、要するに主格に立つもの(知識)と、属格に落ちるもの(何々のといわれるそのもの)との関係如何という問いとしてこそ基本的には考え直すべきことを要求するところの、ひとつの問いだつたのだ。そうして、このひとつの問いこそ今、「一へ統べる」ということによって満足させらるべき問いだと言われるに至つたのだ、と、こういうことである。何故かと言うと、それがソクラテス—アイトスの呼応が実際に示しているすべてなのだからだ。実際 *oûveais* (相互了解) と *$\pi\acute{\epsilon}\rho\alpha\varsigma$* (限定) との要求というようにないかにも二つの要求の如く見える要求も、テアイトスの呼応は、その師テオドロスが平方根の自然数との非通性をいちいちの場合に証明しようとしていたのに対し、これを「一へ統べる」という方法によって普遍的に行おうとするただそれだけのものであつて、それ以上のことは何も語られていないのである。⁽¹³⁾ 従つて我々は *$\pi\acute{\epsilon}\rho\alpha\varsigma$* (限定) をつけるこの試みは *oûveais* (相互了解) ということをも同時に叶えるべきものであるとも解するより他に途はないのだ。それ故、更に我々は、その普遍化とは、上に見られるところからすれば、分割、命名—呼称 (*διαλαμβάνειν-ἀντιτάξιεν-προσενεῖν*) という一連の方法によつてこそ、その達成がはかられるものとされているからして、こうした内実をもつた「一へ統べる」という一貫した方法の中でこそ、*oûveais- $\pi\acute{\epsilon}\rho\alpha\varsigma$* (相互了解—限定) の要求は満たされるのだと、こう理解すべきだということになるだろう。

しかしながら、もしそのようにしてアポリアは切り拓かれつつあるのならば、我々はまたそこから次のことをも発見しう

るだろう。それは——一方ソクラテスはテアイテトスに、知識が何の知識であるか、何々の知識であるかという仕方では答えられるところの「何が」また「何々が」知識であるといった答え方を禁じていた。無論それは「知識とは何か」をそも知らぬからであった。だから我々は「知識とは何か」の問いは「何が知識か」の問いに対して優位にあるとも言うのであった。しかしながら他方、我々の前章での確認によれば、優位にある問いは劣位にある問いへの迂回が必然なのであった。だとすれば、今見たように *avûeais - répas* (相互了解・限定) の問いとは、属格に落ちるものと主格に立つものとの結合如何について基本的に問うものだとするならば、その問いを解くということは、まさしくその迂回ということ自身のことであると理解すべきだ——と、こういうことである。それ故、ソクラテス・テアイテトスの呼応とはこういうものである。すなわち、ソクラテスが「知識とは何か」と問う問いによつて知識につこうとしたところを、テアイテトスは知識は「何の知識か」つまり「何が知識か」と問う問いの、その「何」を埋めることによつて与えられる「何が知識だ」「何の知識だ」を答える答によつて形式的に知識についたとした。そうしたらまさしくそのところを、もう一度ソクラテスは逆に以下の如く問い直したのだ、と、こういうものである。すなわち、曰く、——知識とは人がそれによつてより智慧あるものとなるものであるのみならず、また人がそれによつて何かを知っているものでもあるだろう。だから何かの知識だ。だから何かの知識だ。それは、ちょうど「君のため」とは「君がため」ということであり「汝が心」とは「汝の心」であるように。しかしそれなら、肝要なのは先ず「ため」ということ「心」ということであるように、知識の場合も、それはよし「何かの」そして「何かか」知識だとしても、肝要なのは、まずはまさしくその「知識とは」ということであろう。何故なら、知るというまさしくそのことによつてこそ、何か知られるものはじめて知られるに至るのであり、知るからこそ何かを知っているからである。すなわち「知っているのだが、それは何かを知っているゆえに知っているのだ」とは、むしろ語られてはならないのだ。⁽¹⁵⁾ それ故、こうも言わねばきであらう。知られるものは知るものよりもより先に、何か客観的に存在しているのだという通念は、恐らく「君が(Ⅱは)⁽¹⁶⁾」知らずとも、つまり君の知識とはならずとも、人々は(Ⅱが)、あるいは我々は(Ⅱが)

知っているのだ」というふうに言うであらうが、しかしまさしくその主張によって、すでに自己懂着に陥っているのだ、と。何故なら、その主張は、こういうものだと考えられるからだ。すなわち、それはもう一歩進めば「人々が、あるいは我々が知らずともつまり我々の知識とはならずとも、知識というものはそれ自身としてあるのだ」と主張するに至るであらうが、しかしその「人々があるいは我々が知らずとも」とか「我々の知識とはならずとも」ということは、「知識は、人々あるいは我々によつては左右されないで、知識それ自身によつてある」ということであらう。そうだとすれば、人々や我々、君やわたくしなど、およそそれらであることによつては知識を知識たらしめえぬものは、単にそれらにあずかるだけのものであることになり、そしてしかし知識は知識それ自身によつてあるということだ。⁽¹⁷⁾しかしそれはどういふことかと言えば、知識は誰一人によつても知られないというものではなくて、たしかに誰かの知識である。しかしそれはまさしく知る人、知っている人（ὁ ἐπιστήμων）によつて知られた知識だ、⁽¹⁸⁾とこういうことであらう。思うにこのことが「見たもののみが知っている」（二〇一B）という意味であらう、と、このように主張するものであると考えられるからである。だがこうした主張は最早明らかに自己懂着していよう。従つて、そうであるなら、我々はこう考えよう。知識は、他ならぬ何かひとつのこのましくそれとしての知識、何かひとつのことをまさしくそれとすることを知り、その仕方を知っている知識だ。ちょうど「ため」とは他ならぬ「君の」そして「君が」ためであり、「心」とはまた他ならぬ「汝が」そして「汝の」心であるようにと。であれば、我々はこう問い直そう。いったいどのようにして「ため」は他ならぬ君の、「心」は他ならぬ汝の、「知識」は他ならぬ何かそのものの、というふうにありうるのであるか、と。何故なら、今も見ただく、「何かを知っている」というだけでは「何ひとつも知っていない」とむしろ言わるべきであり、「知っている」とは、まさしくその「知っている」ということをそれとしてとり出せるようにと、「何かをそれとして知っている」⁽¹⁹⁾のではなくてはならぬからだ……、こうソクラテスは問い直したのではないか。

さて、以上我々は、(1) *συμμετα-πέποι*（相互了解限定）の要求は帰一したる要求であること。つまり、それは属格「主

格の結合如何の問いを問うものであること。(2) そしてその方法は「一へと統べる」というそれであり、その成果は普遍性の獲得であること。(3) そして、それら(1)の要求(2)の方法とは、前章で見られた優位の問い―劣位の問いのアポリアとその打開として迂回とに、それぞれ等しいこと。(4) するとそれは、ソクラテスとテアイテスとの間で「問―答―問―答」という呼応となってあらわれて、「知る」ことの「知っている」ことへの優位を語るものとなったこと、以上四点を確認できたと思うので、この章の最初に我々の見ていたアポリア——「それを何であるか」と知らぬ知識をば「それはしかじかである」と答えるに、いったいどのようにして「すでに知れる」言葉でもってするか——というアポリアはどう解かれてゆくのか、この問いを章をあらためて次に考えてみよう。

三

我々の探究の示すところ、それはまさしく今の(4)の結論、「知ることの知っていることへの優位」ということのその先に秘められている謎の、その探究となるべきであろう。では、その謎とはどのようなものであろうか。それは次のようなことだと考えられぬだろうか。すなわち、テアイテスは彼がすでに知識についているからして(知識を明らかにする暇^レ無みに従事しているからして)つまり、幾何学の智者としてのテオドロスについて(の弟子となつて)いるからして、その成果として、すでに何かを、それとしてひとつひとつ名ざして知識だとなしえている。自分の知っているのは何の知識であるかを答える。「何が知識か」の問いのその「何」を埋め⁽²⁰⁾えている。それはそれでよい。しかしながら、これに対しソクラテスは、「知識とは何か」となおも問うている。だとすれば彼には「知識は、君の知識や君が知識、テアイテスが知識などと、断片的に知識であるのでは決していない。何故か。それは、知識とは決して断片や部分へと転落するものではなく、否、徹頭徹尾同名同義的なものだからだ。普遍的なものだからだ」という信仰があるのではないだろうか……。何かそういうことである。

無論しかし、このことは周知のソクラテス・プラトンの設問だといわれるだろう。つまり、それはすでに第一章で見られた「——とは何か」と問う定義を求める問いと同じものだとして。だから我々の思索はふりだしに戻るわけである。しかしながら「方法」について見られた我々の理解によれば、かくの如くふりだしに戻るこそが我々にとってのそれなりの方法となったことを、人々は理解すべきだと筆者は思う。従って、今、前章の最後でその解明に再着手したところの、かの探究についてのソフィステイケートされたアポリアも、知ることの知っていることへの優位・知識の普遍性・知識の定義可能性——という一連の問いの展開の中でこそ驚異の対象となっていたのだということを、我々は知らなくてはならないだろう。しかしそれはそうだとしても、問題はその目の眩むような驚異の凝視ということである。それ故、我々はまさしくふりだしに戻って、テアイテトスと我々とを驚異せしめているものの正体を見てとらねばならぬ。

方法は、しかしあったのであった。「一に統べる」という方法が。そしてそれは、何が知識であるにせよなおもたゆむことなく「知識とは何か」と問うソクラテスの、知識の普遍性を求めるその要求にまさしく応ずるものであった。

さて、テアイテトスは今ソクラテスに答える、彼の眩惑を、それは知識を生むための陣痛だ。その出産は私が看取ってあげようから、勇を鼓して「知識とは何か」を答え給えと語る、名高い、二人の間の、かの産婆術の語らいの後に——

δοκέει οὖν μοι ὁ ἐπιστάμενος τι αἰσθάνεσθαι τοῦτο ὁ ἐπιδιδάσκων, καὶ ὡς γε νυνὶ φαίνεται, οὐκ ἄλλο τί ἐστιν ἐπιστήμη ἢ αἰσθάναι. (それでは、私に思えますところでは、人にして何かを知っているはたらきにあれば、その人はその知りつつあるところのものを感じているのだ、と、こんなふうに思えます。そして、ええ、そうです。とにかく今あらわれているところからすれば、知識とは感覚に他なりません) 一五一E ——と、このように。

さて、それでは、我々は「一へと統べる」その方法をテアイテトスがどのように用いているか、その成果は普遍的なもの

をかちえたか、こうした点を調べよう。

まず、*dyuavis* (平方根) を例題とした方法練習においての方法の第一段階たる「分割する」ということは、どのように遂行されているか。それはこう解されよう。つまり、「人にして何かを知っているはたらきにあれば、その人はその知りつつあるものを感じているのだ」というのであるから、「それ」を知るという「それ」と「それ」を感じている「それ」とは重なり合っていると見られるが、そうした重合した形のことを対格 (*aitiatuxē ptoas*) として動詞「知る」と「感じる」の中のままに限りとする (*dyadūgāveu*) こととして考えられたということであろう。すなわち *ōvēas - pēpas* (相互了解・限定) の要求が属格・主格の結合の形や如何として問うところが、objective genitive としての属格の意味において、対格と動詞との結合の問いへと移し直されたということである。何故かと言うと、練習された方法こそ、今知識について実行されていると理解するより他はないのだから、何故なら、プラトンは、今やって見せているだけで、他に何も語っていないのだから。さて、そうであれば、次の「なぞる」(*arexāteu*) 段階はどうであるか。練習していた場合には長方形や正方形というもの、ひとつひとつすでに名あるものとしてありえたが、知識の場合にはそうした「すでに知れる」名まえはたしかに何も無い。従って、我々の解釈の余地は、なぞる可能性は手本としての名による場面は欠けているのだから、それを知っていればそれを感じているという「それ」をめぐり起こる重なった二つの行為の名が、事実上保証したのだと考える途より他はないだろう。そこで第三段階である「呼び」(*proelneu*) は可能となって、知識は感覚に他ならずと語られた。

さて、このように方法は遂行されたのだとしても、しかしその成果として、普遍的であるどのようなものがかり得られたであろうか。ただし、普遍的なものあるいは普遍性とは、この場合「いろいろと多くある知識をばひとつのロゴスによって呼ぶ一へと統べる方法」がもたらすべきものであった。だとすれば、明らかだろう、求められている普遍性をみたす形の方法とはならなかったということが。何故なら、「分割」は見られた如くたしかに行なわれたが、しかし知識は決して「いろいろと多く」ありはしなかった。何故なら、「知る」ことの「知っている」ことへの優位に導かれて知る努力をした結果、

ひとつひとつをそれとして知っているのではなくて、知るものゝ知られるものというまきしく二項関係に過ぎぬものの中に閉じこめられて、そうした結合 (*συνδεσμός*) の一方の項に過ぎぬ知識が「何かを知っているなら知っているそれを」という形であるだけだから、そこで我々が先に、「何かを知っている」というだけではむしろ「何ひとつも知っていない」とすべきで、「知っている」とはそれとして取り出されねばならぬとしたそのことを思い出すなら、本来何ひとつ知識として取り出せぬような擬似知識があるに過ぎぬと言わるべきだから。

さて、そうであるとすれば、しかし問題は何よりも先ず第一に、ではどのようにして知識をひとつひとつ取り出せるかという問いに答えることでやはりあったというわけだ。そして、それこそがソクラテスの、何が知識であるにせよなおも「知識とは何か」と問いつづける反問の、その深く意味するところでもあったのであろう。恐らく筆者は、今こゝまで我々の思索を辿って来て、はじめて、先に第一章で *implicit* な仕方で示唆していたところの、我々の意味での *ταύτολογία* と *ἐρευναλογία* ということを、もっと *explicit* なものとして語りうるのではないかと思う。

何故ひとつひとつを取り出しうるか。平方根の場合には手本にあわせただからであるが、またそれは、他面、テイテトスが智者テオドロスについて幾何学を学び得た成果であるとも見られた。然るに、かのろう版の比喩 (一九一C―一九五B) によれば、魂はひとつひとつ学んで自らのろう版に刻印してゆくとも語られる (一九一C六)。そうだとすれば、鍵は、智者と探究するものとの間の教授・学習ということがらの中に、あるのではなくあろうか。学ぶものは、教え示すもの、すなわちすでに知れる智者によって、何をそれとして学び得て知ったかを、知っているかを、試される。学ぶものの学び得たであろう知識こそが、試される。それは智者の知識によって。智者の知識は試されない。それは、まさしく手本として普遍的に示されるパラダイグマだ。⁽²⁴⁾ 学ぶものは、そのようにしたしく示されているパラダイグマによって、学びの異同の体系を、はじめてもつ。もつことにより、知るものともなりうる。そして、彼は、なりゆくであろう……。こうしたいくしみと厳格とによる交わり (*συννοησις*)こそ、我々の対話篇は、ソクラテスの産婆術ののぞむものとして、語るのであった。

他方しかし、ハラデイグマが自らを示すことは、学ぶものの感受の窓へであろう。その感受の窓を通り、ついに学ぶものにこそ与えられる。学ぶものは与えられる。与えられて彼がそれを知る。彼の知識を知る。彼の知識となる。彼は知る。そうだとすると、たとえばテアイテトスがその感受の窓をば、たとえどのようにであるにせよ開きゆくことが、ついには「テアイテトスが知った」従つてまた「彼は知っている」と、こう語られるための *τὸ γνωστόν* だからして、「知る」ことは「知っている」ことに對し優位をもつと語られてきたその意味は、今や、知識をそれとしてひとつひとつ取り出して知っているために知るための、他ならぬその優位なのだという限定をうけることになる。——筆者は、今、比喩を語ろう。この優位の二重性についてのひとつの比喩を。思うに筆者の問うてきたすべての思索は、この比喩を語りゆく中から自らを解きほぐすべき端緒を、見出だすであらう——。

——我々は、酒を飲む。だがしかし、我々は酒の全体を飲むことは出来ぬ。我々は常に酒の一部を飲むしかない。何故なら誰かが酒を全体飲んでしまつたら、最早二度と他人は酒を飲めぬから。だからまた、我々は他人の酒を飲むことはできぬ。他人は他人によつて飲まれる他人の酒を飲み、我々は我々によつて飲まれる我々の酒を飲む。我々は我々の酒しか飲めぬ。それがすべてだ。「一へ統べる」とは、ここではエロースと酒との個々の *συνεργισμός* (結合) だ、ということになる。たしかに我々は、同じ酒を飲んではいないのだとも考えられる。個々のエロースが個々の酒をまるごと飲むだけである、と。それ故、まるごと飲まれる部分的な酒が、その場合、同時に全体であつて、最早別種の全体に至ることはない。至りうるためには、我々は、我々のエロースが個々まるごと飲みほしてしまったものは、しかし同じ酒であり、我々は同じ酒とエロースをともししていたのだということを、発見しなくてはならぬ。饗宴の発見だ。

さて、それでは知識の場合はどうであらうか。我々はすべてそれぞれの人の知識を知ることが出来る。テアイテトスの幾何学的貢献を我々も学び得、彼はまた智者テオドロスにいろいろ学んだであらう如くに。それが真相であるとすれば、我々は、ちょうどあるひとつの銘柄の酒をば、先ず酒杯を手取るエロースによつて飲みほし、胃袋をおし心ゆくまでその味

を味わい、そうしてまた饗宴をも発見すれば、その時その酒を、他ならぬその銘柄の酒と知るであろう如く、知慧にしたしまんとするエロースによって感受の窓を開き、あまねくふりそぐパラディグマをば心ゆくまで考えぬくならば、我々は産婆術のもとで、パラディグマのそれとしての深い真実を知るであろう。そしてまた、饗宴の発見が饗宴の発見に続けば、ひとつひとつの酒の銘柄を知りゆき、ついには酒そのものへと至るであろう如く、産婆術のもとで、ひとつの知識を知り、またふたたび三たび知りゆけば、知識はそれぞれ名こそちがえ、何々を知っているというそれぞれの名によるだけの知識から、ある十分で全体的であるそれへと飛翔しうるであろう……。

酒を恋うるのもエートスなら、知慧にしたしまん心根もエートスである。我々の対話篇が、雄々しく戦い病いに倒れ故郷メガラへと運ばれゆくテアイテトスの、若き日々 of 想い出を、その愛智の暇無みにふさうエートスの称讃でもって始めるのも、その生まれにかなう人となりのどこへついにはなりゆくのであったか、その全体を占ったソクラテスの、まったくつくしみの、一閃光ではなかったか。酒も知識も人も、おのおの異ってもいるであろう。しかしながら、何かありとしある全体の中では、輝ける円環をしたしく保っているのではないか。

(50年6月16日朝)

註

- (1) 実際は容貌の似ていることだけが紹介されたのにそれ以上のことを話の種にしうる天才がソクラテスである。Th.159Aに、「相似ていくことによる同一化」という示唆に富む発言がある。同じくTh.170Bの「神真似び」の思想にせよ、いずれも我々が以下明らかにしたいタウトロギアだと筆者は思う。

- (2) 例えばR. Robinson: Plato's Earlier Dialectic pp. 49-60を参照。特に五一頁の対ソクラテス批判と六〇頁の What is X-question の彼の意味における事実に容認とを比較するならば、後者に与える彼の理由が尤もであればあるだけ、それだけ彼の原典に対する読解力の不足が残念でならぬ。

- (3) 筑摩書房の全集版、第12巻、二二六―二二九頁における、原典 145A, 145E, 146C, 146D, 146E に対する註解。

- (4) 「知識」と「知識している人」は同一だという思想の伝統が我国にもあるのだが（善知識などという）、かの『饗宴』210Eの美の直視においても、見る人と美とは不可分だ。
- (5) ここで知識論とは、知識につくならば必然的に議論されるだろう議論をこそ言う。感覚やドクサにつくならば、決して知識論は行われぬと、かの厳密論（cf. Resp. 340D sqq.）は言うだろう。
- (6) 感覚が知識だとするもの、すでにそうした比喩であろう。
- (7) F. M. Cornford: Plato's Theory of Knowledge, J. H. McDowell: Plato *Theaetetus* (Clarendon Plato Series)
- (8) cf. Phaedr. 242BC
- (9) 粘土をば人間がその仕事において限定する時、彼は例えば陶工となるというのだ。refer することをギリシャはどう考えたか。ソクラテスは『弁明』で、彼の遍歴の理由をアポロンの神託へと仰いで（ἀναφύειν = refer）いる。註(18)を見よ。
- (10) 故にまさしく「Sophists」が続くだろう。
- (11) ……: τοῖς δ' ἐπαιδοῖς ἀδύνατα. 教育と学習、知識の授受という産婆術の観点を、この言葉は準備するのだと思う。かの *Quæsis-je?* にも拘らず、我々は知るのだ。
- (12) cf. Cra. 434E-435A. *ἔπος*（風習）ということの積極性による言葉の定着が語られる。
- (13) 「科学史研究」No. 107における佐藤勝造氏の紹介では、¹⁷でテオドロスが証明を中断した幾何学的理由が種々推測されているようだ。だが我々は「いちいち対すべて」の対立、つまりテオドロスの証明が普遍的証明者タイテトスを生んだ意味のみを問おう。鳩舎の比喩の第一の狩第二の狩という魂の発展能力の示唆の意味も、ここにある。
- (14) 「実質的に」とすでに同じい。
- (15) 知識は対象の指示ではなく命題化されたものとする「見知り知—命題知」の二分という流行の知識説は、まさしくこの点で曖昧と欺瞞とをもつだろう。AはBだと知っているのにもせよ、それはそう知る人の統率力によるのだ。そのことこそ *pro-pono*（題を命ずる）ということであり「メノン」(80D)のアポリアの *πότις* ……: *ποδῆντες*（何をば前に立てた上で）という問いを呼ぶものではないか。そしてこのことが想起説を語るに至るといのが古典的思考なのであろう。
- (16) 「は」と「が」の癒着に注意せよ。

- (17) 「自分で発見するか他人に学ぶか」ということが何故 disjunctive であるかの秘密であろう。cf. Alc. I 109DE, Phd. 85CD etc.
- (18) 註(9)の箇所で粘土が「陶工の」「竈師の」と言われるのと同じだろう。
- (19) 註(11)を付した「可能なかたちに自らをなしている (αὐθιγναι)」と同一平面にあると言えよう。
- (20) ヘラクレイトス断片22の言いかえ。
- (21) Resp. 513BC の踏み台のイメージの鋭さと Phd. 87A-88B の肉体・衣服説の楽しさを思うとよい。知識は飛躍だ。
- (22) 流転説の禁止 (cf. Tht. 152DE, 182C-183A) にも拘らずということに注意すべし。
- (23) 拙稿「プラトン『テアイテトス』第一部の問題」(九大哲学会編「哲学論文集」第六輯)、「*xarh's* から *xarh'prou* まで」(第一薬科大学紀要第一号)を見られたし。筆者は、メカニズムによる感覚の知識へのなり上りの不正なる所以を指摘した。
- (24) cf. Tht. 176E, Euthyph. 6E など。
- (25) cf. Resp. 474C エロースがまろしくエロースであれば、その対象は「すべて」だと語られている。
- (26) Tht. 149D5, 175D5-6, Ap. 20E3 などの *aiadēu eadhai* という言葉の語られ方を参照。

(第一薬科大学講師 昭和四十二年本学大学院修士課程修了・西洋哲学史)